

水稻実証ほの取り組み

山本 勇

(佐賀県白石農業改良普及所)

はじめに

白石平野は佐賀県の南西部に位置し、西方は杵島山の山麓部から南東は有明海に面する穀倉地帯で、肥沃な海成沖積層からなり、土地生産性は極めて高い。

白石町を例にとっても、新佐賀段階米づくり運動の頃の昭和41年の反収は625kg/10a(全県平均542kg)、42年は648kg/10a(全県平均540kg)で、県内有数の米生産地帯であった。また、玉葱や蓮根の生産も多く、地域特産物として名を馳せており、低コスト栽培法として取り組まれている水稻の乾田直播も、田植時の水不足や労力競合回避の為に、干拓地帯を中心に行われている。

しかし、佐賀県にあって米作り地帯であると言われる白石でも、最近の収量の伸びは小さく(かえって減少傾向に有り)、作況指数104であった59年産でも575kgと41～42年に比べて1俵程度の減収となっている。

水稻栽培への取り組み

昭和59年度より佐賀県においては、水稻高位生産技術実験圃を各普及所ごとに設け、県一本での技術対応に加えて各地区毎の作況の把握・地区独自の問題点の摘出および改善・実証を行うこととなり、白石普及所においても白石町の馬洗稲作研究会の協力を得て実証展示圃を設置した。

1. 昭和59年、60年における結果

白石の水稻収量低迷の原因としては、種々と考えられるが、生育を追ってみると、分けつの発生が多く後半は過繁茂傾向となり、後期凋落し収量が低下する。

圃場整備が5割程度済み、特に既整備田での地力の低下が大きく(腐植含量は平均2%程度で、圃場整備田では2%以下)、また、はじめにも書いたように、水稻栽培面積約6,000haの大部分が裏作をおこない、その内の1,500haが玉葱を作付している。

以上のことから、有機物の施用と玉ねぎ跡地の水稻栽培を課題として、麦藁施用における資材の効果・前作と元肥施用量について実証展示を行った。

麦藁の施用については、現実には焼却されることが多いが、圃場排水の良い乾田では、初期水管理を適切に行うことで増収効果が認められ、逆に湿田では生育抑制がおおきく問題であることが、また施肥についても全般に多肥傾向となっており、玉葱跡では、無肥料でさえ初期生育は麦跡元肥N4～5kg程度の生育を示し、収量は過

繁茂の為に玉葱跡は減収し、麦跡も多肥区は劣った。この結果から地区内の稲の栽培暦における施肥量の変更を行った。

2. 今後の問題点

麦藁の施用法や当地区の施肥については、今後に残された問題が多く、特に施肥については籾枯細菌病の発生増加、管内主要品種であるレイホウ(水稻作付の5割程度)の収量低迷とその倒伏対策等を総合的に検討する必要がある。また技術的問題としては、当地区内で、かなりの面積に栽培が行われている乾田直播問題、良質米の振興として取り組んでいるコシヒカリの安定栽培法の検討、近年話題となってきた防除の効率化(減農薬)等がある。

水稻については、大豆・麦のように管理作業の差が直接収量に結び付くことが少なく、また管理作業も平均しているために、技術の差を農家に認識してもらうことはなかなか難しい。

新佐賀段階のことは、農家の新技術を含めた技術に対する意欲は貧欲であったと聞いている。

しかし、減反や米価の抑制で最近の農家の意欲はやや低く、技術を普及する立場にある普及員の数は少なくなってきた現在の現在、新技術や改善技術の浸透を図るためには、伝達経路の再整備が必須条件となってきた。

幸にも、白石普及所管内6町村は、同時放送・無線の整備も行われ、また普及所・農協・共済・町村で組織する指導者連絡会議を中心に、農業試験場・専技室の現地指導を受けながら展示ほの検討や、技術対応を行っているが、現場対応技術のいち早い確立の為に、より一層の相互協力体制の確立が大切である。

おわりに

普及の現場において問題点を摘出し、その改善策を作り上げるためには試験研究機関での基礎研究は、その現場の問題点に直結した研究が望まれ、専門技術員の方々には、より新しいデータ・より有意義な情報の紹介・加工を、お願いし、それを現場で実証することが大切で、普及と研究は一体でなければならない。

展示圃は、新しい技術の普及の手段であるが、現場の問題点等を知る大事な場所であり、特に若い普及員にとっては、技術を身に付ける絶好の研修の場でもある。今後も展示圃は、十分に利用していきたい。